

紅衛兵世代における読書動向について

——文化大革命以前を中心に——

中津俊樹

●
●
●
●
●

はじめに

「プロレタリア文化大革命」（文革。一九六六～一九七六年）が奪権闘争へと発展した一九六七年半ば頃から、紅衛兵を中心とする紅衛兵世代の間に、文革への失望に起因する一種の厭戦的意識が形成され始めた。その中で、彼等の間には文革から距離を置き個人や小集団での読書に没頭する動きが出現した。いわゆる「地下読書運動」である。特に「上山下郷運動」（一九六八～一九七八年）期には、紅衛兵世代による読書サークルや「思想村落」が各地に出現した。

「地下読書運動」を可能にした要因の一つは、文革に伴

う政治的・社会的混乱の中で各種の書籍が社会に流出したことであつた。それらのうち、文革以前には出版制限の対象とされてきた「黄皮書」「灰皮書」と呼ばれる書籍は、成長の過程で革命的理想主義に基づく教育を受けてきた紅衛兵世代の価値観を根底から揺さぶることとなった。彼等は読書や討論を通じて自らの知的欲求を満足させるのみならず、自らが受けてきた教育とその価値観を相対化した上で、独自の思索により文革の本質への理解を深化させることを試みたのである。そして、彼等の一部はマルクス・レーニン主義の古典への独自の研鑽を通じて、最終的に文革と毛沢東思想を批判するに至った。以上の点から、地下読書運動は彼等の思想的覚醒の契機となった現象と位置付けられている。このような立場を取る研究としては米鶴

都、宋永毅、徐友漁、印紅標、陳奎徳のものが挙げられる。^①徐友漁と印紅標は一九六八年以降の地下読書運動に關して、紅衛兵世代に影響を与えた書籍と各地での動向を具体的事例を挙げ論じている。また、蕭瀟はこれと関連し、紅衛兵世代の思想的變化に影響を与えた「黄皮書」「白皮書」のリストを示している。^②これらの研究は、地下読書運動と紅衛兵世代の思想的變化、特に彼等が文革を相対化するに至る経過を分析する上で、興味深い示唆を提示している。一方、葛岩は一九七〇年前後の学校での自らの読書経験に基づき、文革期の学生・生徒による読書運動の背景として、従来注目されることのなかった「青春期の反抗の衝動」という側面に着目する。^③葛岩はこれにより、地下読書運動の背景に文革への厭戰的意識にとどまらない、多様な要因が存在する可能性を提起した。このように、地下読書運動に關しては注目すべき研究成果が発表されている。

近年ではそれに加え、文革以前の段階における紅衛兵世代の読書動向についても、回想録や聞き取り等を通じ実情が徐々に明らかになりつつある。それらの内容は、彼等が革命的理想主義を主軸とする教育の影響を受ける一方、それとは別に自らの嗜好と意思に基づく読書を楽しむことができた事実を示している。ここからは、彼等が文革以前の段階において、「政治人」^④という概念に象徴される、単一

の価値観・倫理観を基盤とした世代的意識にとどまらない、より多様な価値観をも発展させる潜在的条件を持つていた可能性を見出し得ると思われる。だが、この問題に關しては充分な研究がなされているとは言い難い状況である。例えば、徐友漁は元紅衛兵への聞き取りを通じ、紅衛兵世代が文革以前と文革中にそれぞれ外国文学を読んだものの、前者の時期においては学校の教師の監視に怯えながら密かに読書をしていた、という事例を明らかにしたが、それ以上の詳細な検討は行っていない。^⑤印紅標の研究も専ら文革期の地下読書運動を關心の対象としており、文革以前の紅衛兵世代の読書動向については言及していない。また、日本国内での研究については言えば、吉越弘泰が文革期の「政治言語」に關する研究において紅衛兵世代が一九六七年後半以降に「毛沢東政治と言語からの離脱」を始める過程に着目し、彼等が「大批判」言語に抗し、それを越えていく可能性^⑥について検討している。その反面、文革以前の彼等の意識と読書の関わりについては考察の対象とされていない。

そこで本稿では、従来必ずしも注目されていなかったこの問題について、文革以前における書籍の出版動向等を踏まえた上で、紅衛兵世代の回想などに着目しながら考察を試みることにする。具体的には、「黄皮書」「白皮書」に加え、この時期に出版が公認されていた外国文学や哲学書に

注目し検討を進める。後述するように、前者はその大半が同時代のソ連・東欧社会主義圏、国際共産主義運動における「修正主義者」の著作や、欧米の書籍であった。これらはその性格上、党・政府・軍高級幹部や専門職従事者のみを対象として出版されており、一般読者がそれらを手にすることは原則上、想定されていなかった。それに對し、「黄皮書」「白皮書」以外の外国文学、哲学作品は一般読者向けに出版されていた。これらの書籍はその内容において性格を異にするものの、いずれも海外の文化や事情に由来する価値観と観点を含む点において、紅衛兵世代に革命的理想主義とは異なる価値観を發展させる可能性を与えうるものであったと考えられる。

ところで、筆者は以前、中華人民共和国成立後の国家建設の過程における共産党政権の目的の一つとして、新国家の政治・社会的価値観の基盤としての「マルクス・レーニン主義、毛沢東思想」という概念の定着と、政権が提示する政治的・社会的理念を新たな「常識」として共有する存在としての「人民」^⑧「中華人民共和国人」の創出という課題が存在していたと考えた。「人民」の創出がかかる方向性をもって推進される場合、その結果出現する「人民」とは、自らの価値観を放棄した人々の集合体としての、思想的に単一かつ無機質な政治的存在に他ならなかった。だが、一方ではこのような動きから密かに距離を置き、自ら

の内的営為とそれに基づく「内心の自由」を堅持し続ける人々も存在していた。^⑧文革期の地下読書運動も個人あるいは集団という差こそあるものの、そこに加わった人々が読書という方法により、個人の内面という不可視かつ他者からの物理的干渉が不可能な領域において自由な思索を試みた点で、それと同様の性格を有するものといえよう。であるならば、本稿が対象とする文革以前の紅衛兵世代の読書動向からは、いかなる性格を見出しうるのであろうか。

本稿ではこれらの問題について、文革以前の紅衛兵世代の読書動向に着目した上で検討を試みる。それにより、従来、革命的理想主義と階級闘争を基軸とした教育の影響を強く受けた「政治人」というイメージによって捉えられてきた紅衛兵世代とその意識について、新たな知見を提示することを、本稿の目的とする。

一 文革以前における書籍の出版動向

(一) 中華人民共和国成立後における書籍の出版動向

まず、中華人民共和国成立後の書籍の出版動向とその特徴について、確認しておく。徐友漁によれば、共産党政権の成立後、外国文学の翻訳、出版は西洋文学を批判的に継承するという政策の下で系統的に継続された。また、西洋

文学は批判的に読むことが必須とされたが、その意図は西洋の文学作品にみられる革命的要素を利用することにあつたという。それらを通じ、政権は外国文学にみられる旧制度・旧文化への叛逆、社会変革への憧憬などの感情を利用し、革命的意識形態の強化を目指した。⁽⁹⁾

一九六〇年代に入ると、江青らが中心となって、文学・芸術作品や舞台演劇、映画作品等への批判が本格化した。学校教育においては雷鋒（人民解放軍兵士。一九四〇〜一九六二）に象徴される革命的理想主義を体現する人物の事績が、青少年の模範として強調された。また、中国・ソ連両共産党のイデオロギー対立を反映し、西洋文学に加えソビエト文学が「修正主義の毒素をまき散らす」ものとして危険視されるに至った。⁽¹⁰⁾

以上の情勢を反映し、外国文学・哲学書の一部は「内部読物」「黄皮書」「灰皮書」に分類され、特定の読者のみを対象に出版されるに至った。これらの書籍の出版は一九六〇年代初頭と七〇年代初頭の二回にわたって行われた。前者においては、中ソ論争を反映し国際共産主義運動における諸思潮や「修正主義」、西側資本主義社会に関する理解を深化させる上で有用と判断された書籍が出版された。⁽¹¹⁾ 文革以前の段階に、高級幹部を対象に出版された書籍は一〇四一冊にのぼった。⁽¹²⁾ 印紅標によれば、上記の区分のうち「内部読物」は共産党・各級政府幹部や専門職従事者、あ

るいは一部の読者のみを対象として出版された。それらは政治的・思想的な影響度を基準として、出版、印刷数や発行範囲、発行方法や管理方法が区分された。「内部読物」には書籍に対する管理のレベルを基準として、「内部参考用」「内部読物」「内部発行」「国内限定」等の種類が存在していた。それらのうち、当局の政治・意識形態と対立する内容の書籍は最も厳格に管理され、発行量も少なく、党・政府高級幹部と慎重な審査を通過した専門職従事者にのみ批判資料ないしは対外闘争用の資料として提供された。

「内部読物」にはさらに表紙の色により「黄皮書」「灰皮書」の区別が存在していた。この二つのカテゴリに含まれる書籍は発行範囲が厳格に制限されていた。「国内限定」とされた書籍は実際には一般読者に開放されていたが、書籍の扱いに関する判定基準は各時期の政治状況に左右された。⁽¹³⁾ また、蕭瀟によれば、「黄皮書」は文学関連、「灰皮書」は西側やソ連・東欧諸国の「修正主義者」による政治・法律・文化関連の書籍であった。⁽¹⁴⁾ MacFarquharによれば、「灰皮書」とされた書籍には一九六三年に中国共産党がソ連共産党との公開論争を前に理論担当者用に準備した、新旧「修正主義者」の書籍が四〇冊含まれていた。それらはカウツキー、ベルンシュタイン、グラムシ、トロツキー、ブハーリンに加え、中ソ論争と同時代のソ連、東欧諸国、ユーゴスラビアの理論家の著作であった。⁽¹⁵⁾ なお、後

者を「白皮書」としている事例も存在するが、呼称が違うのみで分類上同じ性格を有するものと考えてよいであろう。⁽¹⁶⁾

(二) 「黄皮書」「白皮書」と外国文学の出版をめぐる

それでは、上記のカテゴリに含まれる書籍は具体的にいかなるものであったのであろうか。蕭瀟は、文革期の「地下読書運動」において紅衛兵世代の意識変化に影響を及ぼした「灰皮書」「黄皮書」を三五冊挙げて⁽¹⁷⁾いる。うち約半数は一九五〇年代後半から文革直前にかけて、残りは米中関係が改善へ向い始めた七〇年代初頭に出版されたものである。

宋維枏（少将、海南軍区共産党委員会書記、軍区第二政治委員、解放軍政治学院副校長）の長男で、文革初期に北京・清華大学附属中学の紅衛兵組織の初期メンバーであった宋伯林は、文革発動直前の一九六六年一月から一九六八年二月下旬まで日記をつけている。宋は六六年秋以降、何らかの理由で文革への積極的な参加に興味を失ったようであるが、その頃から宋の日記には読書に関する記述が増え始めている。⁽¹⁸⁾その中には、「内部発行」扱いの書籍についてのメモも残されている。それらの内容から、文革以前に「灰皮書」「黄皮書」とされた書籍の種類について部分的にはあるが、垣間見ることが可能と思われる。蕭瀟と宋が

取り上げた書籍は、それら全てを包括するものではないが、「内部発行」も含めた文革以前の書籍の出版状況や紅衛兵世代の青少年の読書動向を検討する上で、極めて興味深い事例であるといえよう。そこで、蕭瀟の研究および宋伯林の日記で取り上げられた書籍から、一九六六年までに出版された海外関連の「灰皮書」「黄皮書」を抽出し、さらに分野と時系列を軸に再配列すると以下ようになる。

国際共産主義運動、ソ連・東欧関係（一一件）：

アンナ・ルイス・ストロング『スターリン時代』（北京・世界知識出版社、一九五七年）、フルシチョフ『完全な軍備撤廃のために：第一四回国連総会における演説』（*World without Arms, World without Wars*）（北京・世界知識出版社、一九五七年）、ミロヴァン・ジラス『新しい階級』（北京・世界知識出版社、一九五七年）、ラザル・ピストラー（音訳）『大策略家・フルシチョフ』（北京・知識出版社、一九六三年）、アダム・シヤフ『人の哲学・マルクス主義と実存主義』（北京・三聯書店、一九六三年）、トロツキー『スターリン』（北京・三聯書店資料室、一九六三年）、トガ・グナワージナ『フルシチョフ主義』（北京・世界知識出版社、一九六三年）、トロツキー『裏切られた革命』（北京・三聯書店資料室、一九六三年）、ヴェリ

コ・ブラホヴィッチ（音訳）『ユーゴスラビア共産党綱領と思想闘争の「尖鋭化」』（北京・三聯書店、一九六四年）、ロジェ・ガロディ『人的遠景——存在主義、天主教思想、馬克思主義（中国語題名）』（北京・三聯書店、一九六五年。原題はRoger Gaudy, *Perspectives de l'homme, existentialisme, pensee Catholique, Marxisme*）。

ソヴィエト文学（六件）：

シモノフ『生者と死者』（北京・作家出版社、一九六二年）、エレンブルグ『我が回想・人間・歲月・生活』（二、三卷）（北京・作家出版社、一九六二—一九六四年）、同『雪解け』（北京・作家出版社、一九六三年）、ソルジェニーツィン『イワン・デニソヴィッチの一日』（北京・作家出版社、一九六三年）、エフトシエンコ『バビ・ヤール』（北京・作家出版社、一九六三年）、ワシーリー・アクシヨノフ『星の切符』（北京・作家出版社、一九六三年）。

近現代世界史関連（五件）：

アンドリュウ・タリー『CIAの内幕』（北京・世界知識出版社、一九六三年）、マチエ『フランス大革命』（北京・商務院書館、一九六四年）、ウィリアム・シャイラー『第三帝国の興亡』（北京・世界知識出版社、一九六五年）、トインビー『歴史の研究』（上海・上海人民出版社、一九六六年）、ロベルト・ユンク

『千の太陽よりも明るく——原爆を造った科学者たち』（原子能出版社、一九六六年）。

欧米近現代文学・哲学（六件）：

カミュ『異邦人』（上海・上海文芸出版社、一九六一年）、ジョン・オズボーン『怒りを込めて振り返れ』（北京・中国戯劇出版社、一九六二年）、ジャック・ケルアック『路上』（北京・作家出版社、一九六二年）、サリンジャー『ライ麦畑でつかまえて』（北京・作家出版社、一九六三年）、サルトル『嘔吐』（上海・作家出版社上海編集所、一九六五年）、サミュエル・ベケット『ゴドーを待ちながら』（北京・中国戯劇出版社、一九六五年）。

宋伯林の日記にはこれらに加え、「内部出版」ないし「白皮書」「黄皮書」の区別が明示されていない海外関連書籍も含まれている。それらは以下のとおりである。

国際共産主義運動・ロシア革命・ソ連関連（三件）：

ジョン・リード『世界を震撼させた十日間』『ソ連共産党（ボリシェビキ）史』、マルクス、エンゲルス『共産党宣言』。

世界情勢・現代史関連（三件）：

キンルマン（音訳）『順川で発見された日記』、作者不

詳『ヒトラー』(Elliott Roosevelt, *As He Saw It*).

ロシア文学(一四件):

ゴークリ『鼻』、ゴークリ『幼年時代』、『人々の中で』、ツルゲーネフ『ムム』、『処女地』、『貴族の家』、『不幸な女』、チュエルヌイシェフスキー『何をなすべきか』、『ドストエフスキー』、『虐げられた人々』、『トルストイ』、『戦争と平和』、『アンナ・カレーニナ』、『復活』、『レハノフ』、『宛名の無い手紙』。

ソヴィエト文学(一九一七年以降、一五件):

アレクセイ・トルストイ『苦悩の中を行く』、『エレンブルグ』、『雪解け』、『オブローチエフ』、『サニコフ』、『地を発見する』、『オストロフスキー』、『鋼鉄はいかに鍛えられたか』、『コチエートフ』、『州委書記(中国語題名)』、『ジュルビン一家』、『シェブリヤコフ』、『マルクスの青年時代』、『ストウジトスキー』、『黒海宝蔵(中国語題名)』、『ババイエフスキー』、『金星英雄(中国語題名)』、『ファジェーエフ』、『若き親衛隊』、『ポレヴオイ』、『真正の人(中国語題名)』、『マキシム・ゴークリ』、『私の大学』、『クリム・サムギンの生活』、『Y・イリーナ(音訳)』、『グリヤの道』、『ラブレニエフ(音訳)』、『四一番目(中国語題名)』。

アメリカ・ヨーロッパ文学(三三件):

イプセン『人形の家』、『ゲーテ』、『ファウスト』、『ロバ

ト・ステイーブンソン『新アラビア夜話』、『ジャック・ロンドン』、『ひと切れのビフテキ』、『海の狼』、『殺人株式会社』、『シェークスピア』、『ロミオとジュリエット』、『オセロー』、『十二夜』、『スタンダール』、『赤と黒』、『セルバンテス』、『ドン・キホーテ』、『ディケンズ』、『二都物語』、『ピクウィック・クラブ』、『バルザック』、『ラ・ブイユーズ』、『ジュール・ヴェルヌ』、『地底旅行』、『八十日間世界一周』、『海底二万里』、『バイロン』、『ドン・ファン』、『ボッカチオ』、『デカメロン』、『マーク・トウェイン』、『ノータリン・ウイルソンの悲劇』、『モーパッサン』、『首飾り』、『脂肪の固まり』、『洋服筆筒』、『港』、『生の誘惑(イヴェット)』、『かんらん畑』、『浮浪者』、『遺産』、『酒樽』、『メリメ』、『カルメン』、『ロマン・ロラン』、『ジャン・クリストフ』、『ヴィクトル・ユゴー』、『九十三年』、『E・L・ヴォイニッチ』、『牛虻』。

共産党高級幹部の家庭に生まれた秦暁は、自身が文革期の「上山下郷運動」(一九六九年開始)期に自宅から移住先へ持ち出した書籍を挙げている。以下はそれらの一部である。秦の回想においては、それらの出版時期や「黄皮書」「白皮書」の区分は示されていないが、少なくとも文革以前には既に流通していたと判断して差し支えないであろう。^⑨

アイザック・ドイッチャー『トロツキー伝』、サリンジャー『ライ麦畑でつかまえて』、シャルロット・ブロンテ『ジェーン・エア』、シヨールロフ『静かなるドン』、ゾラ『ナナ』、ツルゲーネフ『父と子』、『貴族の家』『獵人日記』、ロマン・ロラン『ジャン・クリストフ』、チェルヌイシェフスキー『何をなすべきか』、『ハインエ』、『ドイツ・冬物語』、『ミロヴァン・ジラス』、『新しい階級』、『ヴィクトル・ユゴー』、『九十三年』、『作者不詳』、『この人はバルエフ』。

これらのうち「灰皮書」「黄皮書」に関してはその性格上、一般市民が自由に手にすることは原則上は容易ではなかったと考えられるが、その反面、上記の内容からは、少なくとも各分野の専門家が同時代の欧米資本主義社会も含めた世界の文化・芸術、さらには政治動向についての情報から完全に遮断されてはいなかった事実が窺える。

また、宋伯林と秦暁が挙げた書籍から「黄皮書」「灰皮書」を除外した場合、残りの書籍のかなりの部分が一般向けに出版されたものであったと推測できるであろう。ここから、一般市民が比較的自由に手にすることが可能な外国文学・哲学作品も決して少なくはなかった、という事実が明らかになる。それとの関連で言えば、一九五〇年代末から六〇年代初頭にかけては、古書店での書籍販売は国営書

店と比較して管理が厳格でなかったため、古書の入手が容易であった^②。それらのなかに、一九四九年以降出版が禁止されたり「黄皮書」扱いにされたものが含まれていた可能性も、否定できない。このように、一般読者は「黄皮書」等に触れる機会こそ有していなかったが、それ以外の各種の書籍を入手する余地はなお、残されていたのである。このような状況は、読者が読書を通じて多様な作品とその価値観に触れた上で、自己の内面という他者による物理的な干渉からの自由を確保し得る領域において、自由な思索を行うことをも可能にするものであったといえる。

以上の点を踏まえた場合、一般読者が実際に外国文学・哲学を巡る政権側の先述の意図に沿った形で読書を行ったかに関しては、大いに疑問が残る。端的に言えば、政権の意図や方針の如何を問わず、読者が最終的にそれと合致した意識形態を共有するに至るかについては、それが個人の価値観という不可視の領域に属する問題である以上、その成否を確認することは事実上、不可能だったはずである。

例えば、文革期に造反派組織に参加したある人物は文革以前の青年期に、ディケンズ、モーパッサン、モリエール等の作品を愛読していたが、読書への没頭は、彼が現実社会の様々な問題から距離を置き充実した日々を送ることを可能にした。この人物はまた、ソ連の現代文学作品『州委书记』が描くソ連共産党の市委員会書記の勤務姿勢と中国の

幹部のそれを比較し、後者に批判的意識を抱くに至った。⁽²¹⁾

このように、一般市民は政権が文学作品に期待した効果や意図とは無関係に、読書を通じて自らの想像力を自由に駆使することにより、社会的事象を含めた様々な問題に関する独自の見方を、自らの価値観に基づいて密かに発展させることができたのである。これは、「黄皮書」「灰皮書」あるいは出版が公認された作品という区別に関わりなく、読書という行為の結果として生じうるものであったといえる。この意味から言えば、「黄皮書」「灰皮書」とそれ以外の書籍を区別し、前者の影響のみを警戒することは、外部からの情報流入の制限に関しては一定の効果が期待できる反面、価値観の平均化の試みという観点から見れば、期待されたほどの効果を発揮し得るものではなかったかもしれない。

文革以前の出版政策は、政治的意図に基づいて読者の意識や価値観を特定の方角に誘導する目的を持ち、かつ情報の制限を伴っていた点において、読者に自由な読書環境をもたらしうるものではなかった。しかしその一方、外国文学・哲学書籍の出版自体が継続されたことは、その本来の意図とは関わりなく、一般読者が読書により自己の内的営為を深化させるだけでなく、彼等が全世界の文学・哲学愛好者が共有する価値観から決定的に断絶する可能性を、結果的に免れさせたといえる。それにより、個々の読者は独

自の内的思索を深化させることが可能になったのである。この点から言えば、文革以前の一連の出版政策は政権側の意図にもかかわらず、一般読者を単一の価値観・倫理観を共有する「人民」へと変化させる、という目的を達成する上で充分なものではなかった、といえよう。

二 紅衛兵世代の読書をめぐって

(一) 紅衛兵世代の読書環境

——革命的理想主義と外国文学・哲学

紅衛兵世代の青少年は、まさにこのような環境の下で読書を行っていたのである。であるならば、彼等が政権の意図と合致する範囲でのみ読書を行っていたと考えることには、限界が存在するように思われる。そこで、文革以前の時期における彼等の読書を巡る実際の状況について、主に学校での事例に着目して見てみたい。外国文学・哲学を巡る政権の意図に着目すれば、これらの書籍は論理上、その内容が「ブルジョワ的」価値観への批判的要素を含み、かつ革命的意識形態の強化に寄与すると判断される限りにおいて、禁止の対象とはなり得なかったはずである。

しかし、実際の状況はそれとは異なっていたようである。徐友漁によれば、文革以前の学校ではクラス担任や各

学校の共青团支部書記が学生の読書動向を監視し、外国小説を愛読したりその影響を受けた形跡のある学生には、忠告や警告、批判を行った。そのような環境は、徐の聞き取りに応じた元紅衛兵が「(文革以前は) 怯えながら読書をしていた」と形容するような雰囲気を出させた。⁽²³⁾この場合、ある学生が読んでいた作品が、政権が資本主義批判の要素を含むと位置付けていたものであったとしても、批判を免れることは必ずしも容易ではなかった。例えば、ウィリアム・サッカレーの『虚栄の市』は、この種の性格を有する小説と評価されていた。⁽²⁴⁾学校当局がこの事実を把握していたなら、この作品の政治的意義を認めた上で、読書を通じて学生の意識を誘導することも可能だったはずである。だが、文革発動前の一九六〇年代前半、同書を読んでいたある女子学生は、大学当局から「一八世紀の古い小説の影響を受け、前途を悲観、失望している。社会発展の趨勢と個人の願望は一致しない。社会主義は集団であることを求めるが、個人は自由に憧れる。社会主義は『個性』を発揮できず、『人と人の関係は戦いであり、真の感情が無い』、等の意識を有している」人物との評価を下されるに至った。⁽²⁵⁾いわば、この学生は政権がその教育的意義を高く評価していた作品を読んでいたために、批判を受けたということになる。ここから、外国文学・哲学を巡る政権の方針を学校当局が実質的に阻害し、かつその背景には外国文

学自体を悪と見なす認識が存在していたことが見て取れるのである。

その一方、複数の元紅衛兵世代の人々の回想は、この事例が必ずしも文革以前における読書環境の典型として一般化し得るものではないことをも、示している。それらによれば、彼等は幼年期には革命的理想主義を強調する教育を受ける一方、同時にグリムやアンデルセンなどの童話に親しむことができた。⁽²⁶⁾これらの童話は純粹に子供向けの物語として位置付けられたわけではなく、幼少期の子供たちに資本主義社会に対する否定的イメージを抱かせる効果が期待されていたようである。⁽²⁷⁾だが、それは本来の意図とは無関係に、幼児期の彼等を世界の優秀な文化との断絶から免れさせた。⁽²⁸⁾その後、学齢期に達した彼等は学校において、革命的理想主義に基づく「人生観教育」や価値観の一体化を目的とした教育を受けることとなった。ただ、その場合でもそのような教育に精神的苦痛を感じ、学校を「思想が強制され、天性が抑圧され、個性が歪められる」場とみなす学生が現れるのは、不可避であった。このような感情に直面した時、彼等がそれから距離を置く手段として見出したのは、学校から与えられた書籍ではなく、「魯迅、ドストエフスキー、トルストイ、フォイエルバッハ、ヘーゲル、カント」等の著作から「個人の思想的歩み」を見出し、自らの自由な思考の世界に入り込むことであった。⁽²⁹⁾

れは、彼等が革命的理想主義を強調する教育への違和感を感じた時、そこから自由になる手段を外国文学・哲学とその提示する価値観に見出したことに他ならなかった。

また、彼等は学校から離れた場においては、中国と海外の古典・現代文学、哲学などに触れる機会をも有していた。その内容は多岐にわたり、欧米やソ連の文学作品等に加え、欧米のSF小説や探検小説なども好んで読まれた。

例えば、ジュール・ヴェルヌの『神秘の島』『海底二万里』等の作品はこの世代の青少年から一定の支持を得ていた。^{③①}このような読書は単に文学への愛好にとどまらず、

「学校では正統な教育を受けていたが、放課後にはモーパーサン、チエーホフ、トルストイ、マーク・トウェインと魯迅、徐志摩、郁達夫の下に向かった（中略）。校門の外には書籍という自由な小天地があつた」という回想に示されるように、学校での革命的理想主義に基づく教育とその価値観を絶対化することなく、一度学校から離ればそれから自由になる方法を、彼等に学ばせることとなった。

ここに、「政治家」としての特質を具えていたはずの彼等が、一方ではそれにとどまらない現実主義的発想、行動様式を身につけていた事実の片鱗をも、見出せるであろう。

紅衛兵世代は、学校においては革命的理想主義的価値観に基づく教育を受ける一方、私的な空間での自由な読書により、それとは別の価値観に基づく独自の内的領域を密か

に形成する可能性をも、手にしたといえる。これにより彼等は、「階級闘争」を絶対化する「政治家」^{③②}という紅衛兵世代のイメージとは必ずしも一致しない、独自の感覚を身につけるに至ったといえよう。部分的な事例であるにせよ、このような傾向が文革以前の段階で出現していた事実は、文革期の彼等の行動の特徴を検討する上で極めて興味深い示唆を提示しているのではないだろうか。

(二) 幹部子弟が果たした役割

紅衛兵世代の読書を巡っては、各学校に在籍していた高級幹部子弟が独自の役割を果たすこととなった。彼等は父兄の職責の關係上、「黄皮書」「灰皮書」、各種の「内部文件」への日常的な接触を通じて、「情報特権」^{③③}を享受することが可能であった。父兄が子女の知的関心を高めさせることを目的として、本来は指導幹部を対象に配布された文書を積極的に読ませることも、珍しくはなかった。^{③④}知的関心の強い子女にとっては、このような環境は自らの知的欲求を満たすだけでなく、多様な価値観に触れ自由な思索を進めることを可能にしたといえる。彼等はこれらの書籍や文書を通じて、「学校の教師からは聞いたことのない」社会の負の側面の存在を、文革以前の段階で既に知ることとなった。そして彼等は多様な情報を自らの自由な観点から分析し、それを通じて「新聞報道の選択性と目的性が、余

りにも大きいこと」や「様々な事実と観点の存在」を認識するに至った⁽³⁶⁾。彼等はそれにより、学校教育が与える価値観から距離を置き、革命的理想主義とは異なる価値観を、一般家庭の子女よりも先に身につけ得る条件を手にしたのである。党・政府・軍機関における彼等の父兄の職責や、彼等がその立場上擁護すべき価値観などから考えれば、これは一種のパラドックスであったといえるかもしれない。

高級幹部子弟は自らの「情報特権」を、必ずしも同様の家庭的背景を有する友人間のみで独占したわけではなかった。彼等のなかには、同級生の間での読書への関心の高まりに呼応する形でそれらの書籍を学校へ持ち出したり、友人間での貸借に供する者も現れ始めた。例えば、後に著名な映画監督となった陳凱歌は両親がいずれも共産党員ではなかったが、文革が発動された一九六六年には一四歳の中学生であったが、文革以前の時期に、軍高級幹部を父親に持つ友人からウィリアム・シャイラーの『第三帝国の興亡』やジョン・ガンサーの『アフリカの内幕』等を借りて読んでいた。陳は文革の初期段階においても、この友人を経由しサリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』や、ジョン・ブレインの『のし上がる余地』などの「内部出版」扱いの書籍を読んでいた⁽³⁷⁾。これらの書籍は、文革初期には紅衛兵による「四旧打破」の過程で一部が社会へ流出し、その後の「地下読書運動」およびそれと前後した彼等の思想

的覚醒に多大な影響を及ぼすこととなった。『第三帝国の興亡』は、紅衛兵が対立派閥と理論闘争を展開する際に資料として用いられた⁽³⁸⁾。地下読書運動期には、彼等は同書におけるナチス支配下のドイツに関する記述から、前者と文革の現実との共通性を見出した⁽³⁹⁾。また、『のし上がる余地』と『ライ麦畑でつかまえて』は紅衛兵世代から幅広い支持を得ていた⁽⁴⁰⁾。紅衛兵世代のなかには、地下読書運動においてこれらの書籍に初めて接した者も少なくなかったようであるが、陳凱歌は文革以前の段階でこれらの書籍を、高級幹部子弟との個人的な交友関係を通じて手にしていたのである。陳凱歌の両親が非共産党員であり、陳が在籍していた学校も文革以前にこの事実を把握していた点などに着目すれば、陳は本来、「情報特権」を享受し得る立場にはいなかったと考えられる⁽⁴¹⁾。だが、彼は政治的・社会的背景を異にする友人との個人的関係を通じて、このような機会を得たのである。ここからは、個人的な交友関係が「情報特権」を部分的にはあるが、突破し得る要素の一つとなっていたことが見て取れるように思われる。

それが必ずしも陳のみの特殊な経験ではなかったことは、同様の事例が他にも存在していた事実からも明らかである。文革発動の時点で北京農業大学附属中学に在籍し、一九六六年一月に「イリン・ティシ」の筆名で林彪（党副主席）批判の公開質問状を発表した劉握中と張立才の回

想によれば、文革以前に彼のクラスでは五名ほどの学生を中心に読書と討論を好む風が形成された。それは高校三年間を通じて続き、彼等自身もその影響を受けた。この過程では、高級幹部子弟の同級生が自宅から「白皮書」を学校に持ち出して友人間での閲覧に供し、学生たちがその内容について討論を進めることもあったという。これらは、徐友漁が元紅衛兵への聞き取りの中で得た、「文革以前には」怯えながら読書をした」という証言とは必ずしも一致しない事例である。また、一連の活動には幹部子弟に加え、様々な家庭の背景を持つ学生が加わっていた。例えば、劉握中は父親が国共内戦時に台湾へ逃れた「反動軍官」家庭の出身であり、張立才の家族には反右派闘争の際に「右派」として打倒された者がいた。にもかかわらず、張がそれを理由に議論から排除されることはなかったようである。学生たちはこうして、名目上は一般市民が閲覧することが制限されているはずの書籍や文書に接し、友人同士で議論する機会を得たのである。

このような場面において、高級幹部子弟が一定の役割を果たした事実は極めて興味深い。彼等が学校へ持ち出した書籍は、一般市民が目にする機会のないものであっただけでなく、場合によっては党や国家が理想とする価値観と一致しない観念を学生の間に拡げる可能性も有していた。より重要なのは、高級幹部子弟のこのような行動が「情報特

権」を有さない一般家庭出身者に、多様な情報や価値観に接した上で、自らの独立した価値観を構築するための条件をもたらし得る点であった。当然、全ての一般家庭出身者が同様の機会を有していたわけではないが、彼等は高級幹部子弟との関わりのなかで、学校教育が提示するものとは異なる価値観に接し、独自の内的営為を深化させることを可能にする条件を、文革以前の段階で既に手にしていたのである。この意味において、高級幹部子弟の一連の行動は彼等自身が享受していた、自由な思考と内的営為の深化に有利な環境を一般家庭出身者へと拡大するものであったといえる。この過程において、いわゆる「出身」の良くない学生が必ずしもそこから除外されなかったことは、文革期に「紅五類」派紅衛兵組織の一部が「出身血統主義」を強調した点を踏まえた場合、興味深いものがある。そして、両者がそれらを基に知的交流を進め、さらに自らの内的営為により学校教育が提示するものとは異なる価値観の確立に向かう時、高級幹部子弟の行為は——本人の意図とは無関係に——、党と国家が理想とする価値観の平均化という試みを事実上、阻害するものとなるのである。ここに、高級幹部子弟が学校での読書において果たした独自の役割が存在していた。

文革期の地下読書運動においては、文革の現実には幻滅した紅衛兵世代の青年たちがサロン形式の討論会や勉強会な

どを密かに結成し、哲学・思想をはじめとする多様なテーマに関する討論を繰り広げた。文革以前の学校での学生の動きは、社会の現実への失望という要素が必ずしも強くなかったと思われる点で、それとは異なるものの、後に紅衛兵として活動することになる青少年が「黄皮書」「灰皮書」ないし「白皮書」が与える新たな視点に触れ、それらを通じて自らの価値観を発展させる契機となったことは確かであろう。その意味において、文革以前の彼等の行動は地下読書運動の予行演習とでもいえるべきものであったといえよう。学校内外でそれをリードしたが、高級幹部子弟だったのである。

(三) 学校における読書と討論を可能にしたもの

高級幹部子弟らを中心とする一連の行動は、学校当局にとつて必ずしも容認し得るものではなかったことは、想像に難くない。特に、彼等が「灰皮書」「白皮書」など、本来は一般市民から遠ざけられていた書籍を校内に持ち込み、一般家庭出身者を含む学生間で討論を展開していた場合、学校当局がその事実を把握した時点で家庭と連携しそれを阻止することは、困難ではなかったと思われる。

にもかかわらず、高級幹部子弟がこのような行動を校内で半ば公然と行うことが可能になった理由は、何だったのであろうか。ここで、彼等自身の家庭における、これらの

書籍や文書的重要性に対する認識に着目する必要がある。例えば、高級幹部を父に持ち、文革以前に中学校に在籍していた劉龍江は、父親の出動後に「機密」扱いの文書を密かに父親の鞆から取り出し読んでいた。⁴⁵⁾ また、前出の秦暁の両親は秦が中学生の頃から、本来はごく少数の高級幹部を対象として刊行されていた『参考資料』を、息子⁴⁶⁾の視野を広げることを目的として積極的に読ませていた。この二つの事例は、文書の管理を巡る家長自身の意識の低さと子弟に対する両親の教育的配慮が、それぞれ子弟がこれらの文書に触れる要因となったことを示している。同様の事例が他にも存在していた可能性については想像に難くないが、ここからは、「内部出版」扱いの書籍や文書の管理に対する高級幹部自身の意識が必ずしも高くなかった事実が読み取れる。であるならば、高級幹部子弟が自宅からこれらを持ち出すのは極めて容易であつたと考えてよいであろう。また、前述の秦暁の事例にも見られるように、高級幹部が一般市民の知り得ない情報を自らの子弟に与えた場合、子弟がその内容を学校で友人間で話題にし、最終的に社会に流出する可能性は想定し得たはずである。にもかかわらず、高級幹部が子弟に各種の書籍や文書を読ませ、かつそれらに対する管理を厳密に行わなかったとすれば、それは事実上、それらが子弟の手によって学校や社会に流出することを、家長や父兄自身が黙認するに等しいもので

あつたと言える。

加えて、教員の中には学生の行動を必ずしも監視の対象と見なさず、彼等の知的水準の向上という観点から支持する者が存在していた可能性も、想定し得るかもしれない。

一九七〇年に西安の中学校に入学した葛岩によれば、彼は当時、欧米文学を含む多くの文学作品を愛読していたが、読書量と知識の豊富さは学校の教員に好意的に受けとめられた。⁽⁴⁷⁾この回想は本稿が対象とする時期とは異なるものの、学生・生徒の知的水準の向上に対する教員の関心から言えば、同様の事例が文革以前の学校においても存在していたことを想定することは、必ずしも非現実的とは言えないであろう。少なくとも、教員や学校当局による黙認ないし支持を受けていない状況下において、学生が校内で自主的な読書や一定数のメンバーが参加する私的討論を公然と行うことは不可能だったはずである。このような環境の下で、紅衛兵世代は革命的理想主義と同時に、それにとまらない多様な価値観に触れ、独自の思索を深めていたのがある。

結 語

紅衛兵世代は文革以前の段階において、革命的理想主義を強調する教育を受けつつもそれを絶対化することなく、

一方では「黄皮書」「白皮書」、あるいは出版を公認された外国文学・哲学書に接する機会をも有していた。このような環境は、彼等が政治的・社会的制限の存在という前提の下で自らの嗜好に基づく自由な読書と内的思索を行い、さらに自らの価値観を発展させることを可能にした。彼等はそれにより、自己の価値観を確立するのみならず、革命的理想主義を自らの内面において相対化しうる条件をも手にしたといえる。例えば、彼等のうち「黄皮書」などの「内部出版」書籍に触れることのできた者は、文革以前の段階において、革命的理想主義を体现する模範的人物としての雷鋒だけでなく、サリンジャーが描く資本主義社会アメリカの男子高校生ジャック・ホールデンと、彼に象徴されるアメリカの一七歳の男子高校生という、共に彼等にとつて同世代である反面、生活様式や意識形態においては完全に対照的であつたはずの人物像に、同時に接することができた。⁽⁴⁸⁾このような機会に恵まれなかった青少年も雷鋒の人生に共感する一方、スタンダールが描く、立身出世を人生の最大の目的とし、その実現のためには手段を選ばないジュリアン・ソレルという、前者とは対照的な人物像とその生き様にも価値を見出していた。⁽⁴⁹⁾この二つの人物像は共に、雷鋒的なそれとは対極的なものである反面、等身大の同世代の行動や内面に関する描写は時代や文化の相違を超え、紅衛兵世代から一定の共感を勝ち取ったといえる。そ

して、このような人物像は紅衛兵世代が革命的理想主義に基づく人生観を絶対化することなく、多様な価値観とそれに基づく人生が存在するという事実を認識する上で、一つの材料となり得たのである。

その結果出現したのは、表面的には革命的理想主義を自らの価値観の指針とし毛沢東と共産党に強い共感を抱きつつも、同時にそれとは別個に自身の内面に独自の世界を構築し、それに基づき前者を相対化し得る潜在的価値観を持つ集団であった。無論、紅衛兵世代の全てがそのような価値観を持っていたわけではないが、少なくとも彼等の一部は文革以前の段階で既に革命的理想主義に基づく価値観から自由になっていったといえる。一九五〇年代以降の出版政策が読者の革命的意識の涵養と、価値観・倫理観の平均化による「人民」の創出を目的としていたと仮定した場合、そのモデルケースとなりうる存在であったはずの紅衛兵世代は、必ずしもそれとは一致しない価値観を身につけるに至ったのである。その意味では、彼等は「政治人」としての世代的特徴を具えつつも、政権が期待した「人民」を全てにおいて体現する存在にはなりきっていなかった、と言えるかも知れない。

にもかかわらず、そのような紅衛兵世代が文革の発動に伴って示したのは、雷鋒とジャック・ホールデンあるいはジュリアン・ソレルの双方からそれぞれ、共感し得る要素

を見出した世代の行動ではなく、雷鋒的な革命的理想主義のみを絶対視する「政治人」のそれであった。そこには、彼等が文革以前の読書経験において形成し得た、学校教育が強調する理念と自らの嗜好に基づく価値観を共存させるという意識は、もはや存在しなかったように見える。また、毛沢東思想を自身の倫理・行動規範とした彼等の行動は、文革以前に彼等の一部が行った知的営為とは、一致しないものであった。これらに着目するならば、文革以前の読書経験と内的営為は彼等の精神的成長にさほどの影響を及ぼさず、かつ文革により雲散霧消してしまった、ということになるであろう。

反面、本稿でも指摘したように、文革以前の教育と読書を巡る紅衛兵世代の姿勢は、この世代が独特の現実主義的感覚を持っていたことをも示していた。そこで、彼等が表面的な行動とは別に、この種の感覚を維持した状態で文革へ参加したと仮定した場合、その行動の背景には「政治人」としての世代的意識や革命的理想主義への共鳴と同時に、それにとどまらない現実主義的感覚ないし動機が存在を見出せるのではないか。であるならば、文革以前における紅衛兵世代の読書と思索の経験は、「人民」ないし「政治人」としての意識形態や行動様式とは別の形で、文革期の彼等の行動に影響を及ぼし得るものへと発展していたと見ることができよう。この点についての検討を深める

ことで、「政治人」というイメージにとどまらない、紅衛兵世代の多様な側面が見えてくるように思われるのである。

注

- 〈1〉 米鶴都『聚焦紅衛兵』三聯書店(香港)有限公司、二〇〇五年。徐友漁『形形色色的造反——紅衛兵精神素質的形成及演變』香港・中文大學出版社、一九九九年。宋永毅『從毛沢東的擁護者到他的反對派——中國文化大革命中年輕一代覺醒的心靈旅程』宋永毅主編『文化大革命——歷史真相和集體記憶』上、香港・田園書屋、二〇〇七年、三六三—三八三頁。陳奎德『中國自由主義在文革中的萌芽』宋永毅主編、同右、四二八—四三七頁。印紅標『失蹤者的足跡——文化大革命期間的青年思潮』香港・中文大學出版社、二〇〇九年。
- 〈2〉 蕭瀟『文化革命中的地下讀書運動』『華夏文摘 文庫博物館專集(二八)』第一三六期、一九九七年一〇月一四日出版。http://museums.cnd.org/CR/ZK97/zk136.hz8.html (二〇一三年四月二四日最終確認)。
- 〈3〉 葛岩『七十年代——記憶中的西安地下讀書活動』『華夏文摘 文庫博物館通訊(五五七)』第七二五期、二〇〇九年一月三日出版。http://museums.cnd.org/CR/ZK09/c557.gb.html (二〇一三年四月二四日最終確認)。
- 〈4〉 米鶴都、前掲書、一六五頁。

- 〈5〉 徐友漁、前掲書、五〇頁。
- 〈6〉 吉越弘泰『威風と頹唐——中國文化大革命の政治言語』太田出版、二〇〇五年、五七四頁。
- 〈7〉 拙稿「文化大革命初期の民間言説に見る『社會主義』認識——紅衛兵と上書者の言説の比較において」『中國研究月報』第六二卷第四号、中國研究所、二〇〇八年、一五頁。拙稿「中華人民共和國建國を巡るカトリック教会・ローマ教皇庁の動向——カトリック教会・ローマ教皇庁の視点からの分析」『中國21』Vol.32、愛知大學現代中國学会編、東方書店、二〇〇九年、二一五頁。
- 〈8〉 拙稿「中國現代史のなかのカトリック教会」『カトリック研究所論集』第一六号、仙台白百合女子大學カトリック研究所、二〇一二年、一〇一、一一九—一二五頁。
- 〈9〉 徐友漁、前掲書、四九頁。
- 〈10〉 同右、二一七頁。
- 〈11〉 蕭瀟、前掲論文。
- 〈12〉 宋永毅、前掲書、三七二頁。
- 〈13〉 印紅標、前掲書、二二七頁。
- 〈14〉 蕭瀟、前掲論文。
- 〈15〉 Roderick MacFarquhar, *The Origins of the Cultural Revolution 3: The Coming of the Cataclysm, 1961-1966*, New York, Columbia University Press, 1997, p.361.
- 〈16〉 牟志京「似水流年」北島・曹一凡・維一主編『暴風雨的記憶——一九六五—一九七〇年的北京四中』香港・牛津大學出版社、二〇一一年、四一頁。

〈17〉 蕭瀟、前掲論文。

〈18〉 宋伯林、余汝信編注『紅衛兵興衰錄——清華附中老紅衛兵手記』香港・德賽出版有限公司、二〇〇六年。

〈19〉 秦曉「走出烏托邦」《北京伝奇》策画、米鶴都主編『回憶與反思——紅衛兵時代風雲人物 口述歴史之一』香港・中国書局有限公司、二〇一一年、一二二頁。以下、米鶴都主編(-)。

〈20〉 劉文忠『反文革第一人及其同案犯』澳門・崇適文化出版、二〇〇八年、二二頁。

〈21〉 沈福祥『崢嶸歲月——首部工人造反派回憶錄』香港・時代國際出版有限公司、二〇一〇年、四五、八九頁。

〈22〉 徐友漁、前掲書、五〇頁。

〈23〉 同右。

〈24〉 徐友漁、前掲書、四九頁。

〈25〉 滕叙究『開国元勳の子女們——哈軍工高幹子女伝記』広州・広東人民出版社、二〇一〇年、二四九、二五〇頁。

〈26〉 葉維麗「一生在思考」米鶴都主編『回憶與反思——紅衛兵時代風雲人物——口述歴史之二』香港・中国書局有限公司、二〇一一年、一四九頁。以下、米鶴都主編(-)。ユン・チアン『ワイルド・スワン』上、土屋京子訳、講談社、一九九三年、三三九頁。

同時期に中国国内で刊行された児童向け書籍に関しては、中国共産党八期十中全会（一九六二年）における「継続革命論」の提起等を反映し、階級闘争的観念や「革命後継者」の理想像を描く作品が主流を占め始めた。その反

面、このような方向性とは必ずしも関係性を見出せない、純粹に児童向けと判断し得る作品も存在していた。例えば、『児童文学』二十年優秀作品選（一九六三、一九八三）には、八期十中全会後の一九六三年から六四年にかけて発表された児童向け小説や詩などが一一編、収められている。うち七編は八期十中全会後の方向性を反映した内容となっているが、それ以外の四編、具体的には金近「狐が狩人を撃つ話し（狐狸打猎人的故事）」（一九六三年九月第一期掲載）、葛翠琳「金花路」（一九六三年十二月第二期掲載）、魯克「尻尾を無くしたのは誰？（誰丢了尾巴？）」（一九六四年五月第四期掲載）、于之「四不象が本領を学ぶ（小麋鹿学本領）」（一九六四年五月第四期掲載）に関しては、この種の要素が含まれていないと考えられる。金近、魯克、于之の作品はそれぞれ動物を主人公としており、かつ階級闘争的観念や理想の「革命後継者」像の強調を一切含んでいない点において、他国の児童向け作品と共通する傾向を持っていると判断できる。葛翠琳の作品は、皇帝が自身の宮殿を建てさせることを目的として有能な大工職人に出頭を命じたのに対し、職人がそれを拒み自害したものの、彼が山奥に密かに建てた建物は後世に伝えられた、という結末になっている。この内容からは、権力者の横暴に対する批判という方向性を読み取ることも可能であろう。反面、この種のストーリーが世界の民話に比較的多く見られるものであることを考えれば、この作品の性格を当時の政治状況との関連性においてのみ解釈することは、必ずし

も妥当ではないように思われる。

なお、同作品選の出版年度を考えれば、文革後の政治状況と合致しないと判断された作品の大半は収録されていないと判断できる。この意味から言えば、同書に収録された作品のみをもつて文革以前の児童向け文学全体の傾向を判断することには当然、限界がある。その一方、それらの作品から、文革以前の児童向け文学全てが必ずしも当時の政治的方向性を反映した、思想教育的内容を含むものではなかったことを読み取ることは、充分に可能であろう。《児童文学》編集部編『《児童文学》二十年優秀作品選 一九六三—一九八三』北京：中国少年兒童出版社、一九八三年。

〈27〉 ユン・チアン、同右。

〈28〉 葉維麗、前掲注〈26〉。

〈29〉 周明主編、劉茵・姜強国編選『歴史在这里沈思』太原：北岳文芸出版社、一九八九年、三〇一頁。

〈30〉 趙京興『我的閱讀與思考』北島等主編、前掲書、二八五、二八六頁。

〈31〉 喬海燕『文革時的“焚書”記憶』『華夏文摘 文革博物館通訊（六八〇）』第八四八期、二〇一二年五月二一日出版、<http://museums.cnd.org/CR/ZK12/ct680.gb.html>（二〇一三年四月二五日最終確認）。

〈32〉 安文江『我不懺悔』『千秋功罪』成都：四川人民出版社、一九九四年、二八〇頁。徐友漁、前掲書、四九、五〇頁。

〈33〉 米鶴都、前掲書、一六五頁。

〈34〉 李大同『草原歸去來』、米鶴都主編（二）、二七四頁。

〈35〉 秦曉、米鶴都主編（一）、九五頁、譚斌『往事莫驚猜』、同右、二八九頁。

〈36〉 劉龍江『我篤信中庸之道』、米鶴都主編（二）、九五頁。

〈37〉 陳凱歌『私の紅衛兵時代』刈間文俊訳、講談社、一九九〇年、四七頁。

〈38〉 周孜仁『一個紅衛兵小報主編的文革記憶』台北：新銳文創、二〇一二年、七四頁。

〈39〉 印紅標、前掲書、二二九頁。

〈40〉 印紅標、同右、二三九頁。秦曉、米鶴都主編（一）、一二二頁。

〈41〉 陳凱歌、前掲書、六〇—六四頁。

〈42〉 伊林・濤西『草根政治——一條至死不渝的道路』、米鶴都主編（一）、二五一頁。

〈43〉 徐友漁、前掲書、五〇頁。

〈44〉 伊林・濤西、前掲注〈42〉、二四六頁。

〈45〉 劉龍江、米鶴都主編（二）、九五頁。

〈46〉 秦曉、米鶴都主編（一）、九七頁。

〈47〉 葛岩、前掲注〈3〉論文。

〈48〉 J・D・サリンジャー『ライ麦畑でつかまえて』野崎孝訳、白水社、二〇一二年。

〈49〉 安文江、徐友漁、前掲注〈32〉。